

頭を描くの適当な模範畫が見付かつたら、それを寫し初めて、ヴェネチヤンレッドで線描をする位いで作業する、そしたら其畫は其儘に保存して置いて、別に寫し初めて、頭に圓味を持たせる爲めに、蔭影を彩る處にて作業する、こんな風に、第三第四と彩色の順を追ふて作業して、其の一段毎の作畫を殘し置き、終には一枚の畫を完成する。斯の如き製作順序を示して置く、幾枚かの畫は極めて必要なるものである。この參考畫を自分の傍へ置けば、或る畫を描いて居て、傳彩の法を忘れた時などに、直に探て其の方法を知ることが出来るのである、されど、これをするには幾多の困苦、忍耐を要する、尤も美術の上達を望む者には此位の勞苦は耐へなければならぬ。要は目的を達するにあるのだ。これで水彩肖像畫は一先づ終りとする。

附言、これはメリファイルドといふ女の書いた本からとつたのだから、今迄いつた、肉色、髪の色などは、日本人を描く場合には其儘應用は出来ぬといふことを、讀者に於て承知して居て貰いたい。

水彩の肖像といふと、夏目君の專賣の様な氣がするが、前述の肖像畫法が、幾多アマチア中に肖像畫を描く人の參考となつて、夏目君の壘を襲ふ様になつたら、夢鷗生は非常に嬉しく思ふのである。

談 片

主觀が強いと、何處を描いても同し様な色や調子になつて仕舞ふ、これは自然を手本としないで、自分の頭を土臺にするからだ、主觀といふのは、自分の感じた點をどう現はさうといふ工風で、目の前の自然の色や調子は決して忘れてはならない。

*

*

*

*

*

*

*

*

*